

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「返しどもなどのしどけなくならばし聞えたる所 <small>く</small> 」の解釈： 狭衣物語（巻四）の本文分析
Author(s)	小林, 理正
Citation	国文学攷, 245 : 13 - 23
Issue Date	2020-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049733
Right	Copyright (c) 2020 by Author
Relation	



「返しどもなどのしどけなくならはし聞えたる所ぐ」の解釈

—— 狭衣物語（巻四）の本文分析 ——

小林 理 正

はじめに

三谷榮一によって狭衣物語の本文が三つの系統に分類されたことはよく知られている。¹⁾ 第一系統は深川本が、第二系統は為家本や九条家旧蔵本が、第三系統は流布本がそれぞれ代表的な伝本とされる。たしかに狭衣物語の本文は深川本と異本、流布本の三種の本文によっておおむね説明できるから、三谷の整理に大きな誤りはない。だが、たとえば第一系統本文のすべてが、第二系統本文および第三系統本文に対立するわけではない。それゆえ、個別的な本文分析を行うさい、この「系統」という枠組みはかえって本文分析に混乱を招く場合があった。この点、片岡利博が第一系統本文を深川本系本文、第二系統本文を異本系本文、第三系統本文を流布本系本文とし、各本文の詳細な分析を可能とする枠組みを示して見せたことは狭衣物語研究史上大きなできごとであった。²⁾ 巻一の本文を例に三

谷の本文捕捉の問題点を確認しておく。各本文で共通する表現には、それぞれ傍線や網掛を施すなどして、対応していることを明示している。³⁾

○ 深川本・巻一・四八丁表〜四九丁裏

我がこゝろしどろもどろになりにけりそでよりほかになみだもるまで

とぞおもひつゞけらるゝけしきも、「げに、しるかりけんかし。」
心ならひは、げにさもやあらん。「へだてあるいもせ」をもたら
ねば」□いひたはぶれさせたまひて、せんえう殿にわたらせ
給ぬれば、こよひはかひなかるべきなめりと、すさまじうてま
かでたまふ。たそがれ時のほどに、二条大宮などわたりにあひ
たる女車（後略）

○ 為家本・巻一・四七丁裏〜四八丁裏

我心しどろもどろになりにけり袖よりほかにみだもるまで

とて、心の中にながめられ給けしきも、げに、しるかりけんか
し。そのよも、宣臚殿にわたらせ給ぬれば、いとくちをしうて、
たそがれ時の程にまかせ給に、二条と大宮にさしあひたる女
ぐるまの、うしのひきかへなどして、とをきほどよりとみゆる
に（後略）

○ 承応版本・卷一之上・四〇丁表～四一丁表

我心しどろもどろになりけり袖より外になみだもるまで
とぞ思ひつゞけらる心ならひは、「げに、さもやあらむ。まこ
とならぬいもうとをもちたらぬば」などいひたはぶれさせ給ひて、
せんえう殿にわたらせ給ぬれば、こよひはかひもあるまじきな
めりと、すさまじくまで給ひぬ。たそがれどきのほどに、二
条大宮のほどにあひたる女ぐるま（後略）

たとえば右の深川本文を、三谷系統論にしたがい、第一系統本
文だと十把一絡げに説明してしまえば、承応版本との語句一致を説
明できなくなる。第一系統や第二系統、あるいは第一類や第二類と
かいった枠組みは本文全体を指すことはできても個別的な本文分析
には向かないのである。なお、挙例の深川本文において、「純粋な
第一系統本文といえるのは、囲み表示部「へだてあるいもせ」のみ
である。深川本当該部が流布本系本文を基本本文としながら、異本
系本文を混入させた様相となっていることが知られるであろう。こ
の本文の混態を三谷の本文把握では説明できないのである。

ここまで従来の本文捕捉では、狭衣物語の本文を理解しきれない
ことを確認してきた。本稿は、片岡が示した本文との向き合い方を
踏まえながら、旧来の本文把握に依拠することはせず、目の前にあ
る本文を十全に分析することで狭衣物語の本文の問題を論じるもの
である。

一、問題の所在

狭衣物語巻四之上。狭衣が春宮のもとへ参上した折、春宮は「ふみ」
を取り出してきた。その「ふみ」中の、春宮が「しどけなくならは
し聞えた」箇所を狭衣は手直ししてやった。——上述のごとく解釈
される場面を版本（承応版本）の本文で示せば、次のようになって
いる。

○ 承応版本・卷之四上・四一丁表

かく参り給ふおり／＼は、さるべきふみ共とり出させたまひ
つゝ、返しどもなどのしどけなくならはし聞えたる所／＼なを
し給ふ。

本稿で注目する本文には傍線を施しておいた。この「返しどもな
どのしどけなくならはし聞えたる所／＼」の一文は、『新潮日本古
典集成』（以下、『集成』）では「東宮の返歌などで、例の宣旨が
いい加減に教え申しあげたしまりのない箇所」（二三四頁）と読み
解かれている。しかし、『新全集』では、底本（平出本）に「かへ

しどもなどの」とありながら、その校訂本文は「文字どもなどのしどけなく習はしきこえさせたる所々」(二五九頁)となっている。『新全集』の巻四担当者(後藤祥子)は「かへしどもなどの」という平出本文が損傷していると判断したからこそ他本(紅梅文庫本)に拠って「文字どもなどの」へ校訂したと推察される。問題は、注釈書間で同じ本文に対して見解が分かれていることであり、この状況下にあっても当該表現の分析、および本文批評がこれまでなされたことがないことである。「返しどもなど」が損傷本文であれば『集成』の本文は誤りということになる。「文字どもなど」への校訂が間違っているならば、『新全集』の措置は見当違いということになる。この二ボタンは共存しえない解釈である。にもかかわらず、これらで当該本文をめぐる本文分析はなされてこなかった。同一本文に対してその理解が揺れるとき、検討本文の損傷を疑ってもよかったのではなかったか。本稿では「返しどもなどのしどけなくならはし聞えたる所々」の読解をとおして、通行する注釈書の解釈の是非を問うたうえで、当該本文の分析を行う。

二、通説の揺れ

狭衣物語の注釈書は、深川本系本文、または流布本系本文を基本とする伝本を底本に採用している。巻一から巻三までは上述の把握がよいが、巻四のみ三谷系統論でいうところの第一系統本文(深川

本系本文)と第三系統本文(流布本系本文)がともに一群を形成するとされ、それ以前の巻とは本文理解の有り様が異なる。⁵⁾本稿で問題とする箇所には、本文をグループピングできるほどの異同は管見のかぎり見当たらない。それゆえ、ここでは「返しどもなど」と本文をたてるもの、「文字どもなど」と本文を作るもの、全訳のために校訂本文を示さないもの、以上三ボタンに分け、その校訂本文および解釈を一覧し、傍線部本文の通説が如何なるものであるか確認する。

A 【返しどもなどの】とするもの】

○『大系』・三七三頁

かう参り給ふおりおりは、さるべき文ども取り出でさせ給つ、返しどもなどの、しどけなく習はし聞えさせたる所々、直し給

【頭注一六】

春宮は、いつも見所みよところのあるような懸想文けんそうぶんなどを取出しなされながら狭衣に見せ、女への返事などで、いいかげんに書くことを侍女達がお書き駈からし申しあげなされていた春宮の筆の箇所などを

○『全書』下・一八五頁

かく参り給ふ折々は、さるべき 文ども取り出でさせ給ひつ、返しどもなどのしどけなく習はし聞えたる所々直し給ふ。

【頭注二三】

かうして、狭衣が春宮の御部屋に参上なさると、春宮はその都

度、然るべき手紙の類をお取り出しになり、狭衣は、それを拝見して、返歌などについていい加減に宣旨が教へ申し上げた箇所を直してさし上げる。

○ 『集成』下・二三三四頁

かく参りたまふ折々は、さるべき文ども取り出でさせたまひつ、返しもなどのしどけなく習はしきこえたる所々直したまふ。

○ 『頭注五』

狭衣は、それを拝見しては、東宮のご返歌などで、例の宣旨が、いい加減に教へ申しあげたしまりのない箇所をお直しになる。

B 【「文字」もなどの」とするもの】

○ 『新全集』②・二五九頁

かう参るだに、折々は、さるべき文ども取り出でさせたまひつ、文字どもなどの、しどけなく習はしきこえさせたる所々、直したまふ。

○ 『現代語訳』

こうやって参上するのさえ、春宮は時々は、しかるべき漢籍などをお取り出しになり、大将が春宮の文字などをきつちりとではないが、それとなくお教へしたような部分部分を直したりなさる。

○ 『全註釈』⑦・四〇一頁

かく参りたる折々、さるべき文ども取り出でたまひつ、文字

どもなどの、しどけなく習はしきこえたる所々、直したまふ。

○ 『現代語訳』・四〇五頁

このように（狭衣が）参上なさった所々に、しかるべき漢籍などを取り出しになさっては文字などで、（東宮学士が）いい加減に字ばせ申しあげた所々を、（狭衣が）お直しになる。

C 【校訂本文を示さないもの】

○ 『全註釈』下・一六二頁

かうして狭衣が春宮の所へ参る折々は、さるべき御文などをとりだして、文字のまずい所などを直してお貰ひなるのであつた。

（圈点ママ）

A B Cで解釈に違いが認められる箇所には、破線・傍線・波線をそれぞれ施してある。「返しもなど」と「文字どもなど」の違いは本文そのものが異なるから、いまは措くとして、破線部と波線部の解釈の揺れについてまとめる。まずは「返しもなど」の本文をたてる『大系』『全書』『集成』の事例をみる。『大系』『全書』は破線部を「見所のあるような懸想文など」や「然るべき手紙の類」と読み解いている。『集成』は当該本文の傍注に「しかるべき手紙類」と記しているから、その解釈は『大系』『全書』と相違ない。しかし、波線部、つまり、春宮へ「返しもなど」を「しどけなく習はしきこえた」人物に関する理解が揺れている。『大系』は「侍女達」、『全書』『集成』は「宣旨」が動作主となっている。なるほど、たしかに問

題の箇所以前、次に掲げる本文からも分かるように、宣旨から和歌贈答にかかることを春宮は教えてもらっていた。

○ 承応版本・巻四之上・三八丁表裏

まだしきにさみだれがちにて物むつかしきひるつかた、大将どの春宮の御かたに参り給へれば、御手ならひなどせさせたまひて、色々のかみなるふみ共とりちらされたり。「なか時々」はかやうの物も見せさせたまはぬ。いとうるさき事どもにはめしまつはして」とえんじ聞え給へば、なまはづかしとおぼしたる御けしきにて、中々ふともえとりかくさせ給はぬに、むらさきのかみのなべてならぬさましたる、むすびめなどもたゞいまのと見ゆるを、ゆかしがり申したまへば、えおしませ給はで、
『式部卿の宮の姫君に聞えよ』と大宮の、給ひしかば、せんじがをしへつるま、にかきてやりつる」とてたまはせたり。

右の本文を手掛かりとすることで『全書』『集成』の解釈が生じたとすることはできる。だが、だとすると、破線部と傍線部の解釈が『全書』『集成』とおおむね同じ『大系』との間で理解が異なる点をどのように判断すればよいのだろうか。この春宮へ「返しどもなど」を「しどけなく習はしきこえた」人物が誰かという問題は、「文字どもなど」と本文をたてる注釈書間においても揺れている。『全譯』『新全集』『全註釈』の解釈も整理し、もう少しこの問題をまとめておこうと思う。

『全譯』『新全集』は、底本に「返しどもなど」とありながら、「文字どもなど」と解釈、または本文を校訂している。この在り方をみるかぎり、「返しどもなど」の一文に問題があると判断していたようである。『全譯』の破線部解釈は「さるべきふみ共」に敬語を加え、語調を整えた程度であり、具体的なことを示さない。また「しどけなくならはし聞えた」人物については、どのように読み解いていたか詳らかでない。『新全集』は破線部を「しかるべき漢籍など」と読み解いている。多義語である「ふみ」を漢籍と解釈したことに因るのだろう。波線部をみると、春宮へ「文字どもなど」を「しどけなく習はしきこえさせた」のは大将、すなわち狭衣とされている。『全註釈』は『新全集』と破線・傍線部の理解が同様なが波線部のみ東宮学士が動作主と読み解かれ、その解釈に違いが認められる。

ここまで主だった注釈書によって通行する解釈を確認した。ここからは注釈者各々が自らの解釈に従い、当該部を読み解いていると知られたであろう。しかし、「さるべきふみ共」の解釈、および「しどけなくならはし聞えた」人物が誰かという点は、その理解がいまだ充分なものとはいえない。原本にない「侍女」や「宣旨」および「東宮学士」などの動作主を補わなければ読み解くことができない。「返しどもなど」のしどけなくならはし聞えたる所々」の一文が、従来そのまま読み解かれてきたところをみるかぎり、当該本文の分析はいまなお不十分なのだろう。

三、損傷本文および通説の整訂

損傷本文である可能性を考慮したうえで、問題の本文をながめていると、「返しどもなどの」あるいは「文字どもなどの」の「の」の解釈に問題があるようにみえる。『全書』『新全集』はそれぞれ「の」を「について」「を」と読み解いている。『全譯』は「文字の」と訳出しているが、「の」をどのように理解しているのか、この解釈からは分からない。これら以外の『大系』『集成』『全註釈』は「の」を同格と判断している。仮に「返しどもなどの」、「文字どもなどの」の「の」を同格と解釈する場合、「しどけなく習はしきこえたる」を、その直後にある「所々」にかかる表現とみることはできない。⁶⁾——「返しどもなどの」、「文字どもなどの」と本文異同が認められるけれど、ここにみえる「の」を同格と読み解いた時点で、その解釈は誤りということになる。

では、この「の」はどのように解釈すべきであったのか。ここは主格で読み解くのがよからう。主格として「の」を解釈すれば、「返しどもなど」「文字どもなど」は文脈上「しどけなく習はしきこえた」動作主に相当することになる。だが、これでは意味をなさない。ここで承応版本に「返し」とあったことを思いかえしたい。承応版本に拠ると「返し」と記されているが、たとえば元和九年本で確認すると「かへしともなどの」とある。「返しどもなどの」の「の」

を同格で読み解けないこと、またこれを主格で読み解こうとするとき、「返し」が動作主となりえないこと、以上二点が問題となるが、「かへし」は「かくし」、つまり「学士」を意味する本文が損傷したものであると想定すれば、「返しどもなどの」しどけなくならはし聞えたる所々」にまつわる解釈上の不審はたちどころに解消される。「へ（部）」と「く（久）」の字形類似による誤写によって、もともと「かくしともなどの」とあったものが「かへしともなどの」に転化し、いまに伝わったと推察される。⁷⁾

手許にある資料の中から校異を確認したところ、「返し」に対応する異文にはいくつかのヴァリエーションがあると知られる。たとえば宇和島伊達文化保存会本には「はかせとも」とある。慈鎮本には「かうしとも」とあり、九大細川本には「かくしとも」とある。このほか、為家本には「ふみしとも」、為相本には「かたこと、も」、松浦本には「もしとも」、為定本には「かへりとも」とある。ただし、為秀本は問題の場面が「かくまひり給をり／＼は、さるべきふみどもとりいでさせ給て、しどけなき所々」なをさせ給」とあって、細かな異同が認められるうえに「返しどもなど」に対応する本文を有しない。宇和島伊達文化保存会本と九大細川本を除けば、右に掲げた伝本は主に鎌倉写本であるから、鎌倉期にはいくつかのヴァリエーションが既に発生していた実態が窺われる。ここで肝腎なのは、たとえば九大細川本「かくしとも」が「学士ども」と読み解けるこ

とであり、この本文であれば「しどけなくならはし聞え」た人物として過不足なく解釈可能であることだ。慈鎮本「かうしとも」は字句どおりに読み解けば「講師ども」と校訂することも可能だが、この理解では文脈になじまない。九大細川本の在り方に鑑み、「かくし」とあったものがウ音便のために「かうし」と変化した派生本文とみておくのがよからう。

ここまでの検討によって「返しどもなどの」が損傷していることは明らかである。それゆえ、底本に「返しども」とありながら「文字ども」へ校訂していた『全譯』『新全集』の校訂態度が正しいものであったと分かる。だが、「文字どもなどの」もまた「返しどもなどの」と同様「しどけなく習はしきこえ」た人物たりえない点において意味不通本文といえる。「返しどもなどのしどけなくならはし聞えたる所々」なをし給ふ」の一文は、本来「学士どもなどのしどけなく習はしきこえたる所々直したまふ」と校訂され、「春宮へ経書を教える学者らなどが、いい加減に教え申しあげた箇所を狭衣ガ）直しなざる」と読み解かれるべきものであったのである。そして、学士や博士などが「しどけなく習はしきこえ」っていたわけだから、春宮が取り出ししてきた「さるべきふみ共」は文脈上、漢籍を意味していたことになる。「さるべきふみ共」を手紙や懸想文と読み解くのは誤りである。なお『全註釈』は「文字どもなどの」の解釈を除けば、稿者私解とほぼ同様だが、⁹⁾「内閣文庫本と第三系統（流

布本・引用者注）には「返し」とあり、その場合は「さるべき文ども」は手紙のことになる」との語釈は、ここまでの検討から明らかのように無用である。

四、「紹巴本Ⅱ流布本の原型」説への疑問

「返しどもなどの」が損傷本文であることは既に述べたとおりである。ここで確認したいのは、この損傷が流布本作成のさいに生じたものなのか、またはそれ以前のものであるのか、である。流布本はその原型が紹巴所用本にあるとされている。¹⁰⁾ 紹巴自筆本は発見されていないが、紹巴所用本を写した旨を記す識語を備えた伝本は残っており、その本文を確認することも可能である。そこで大阪天満宮御文庫蔵木戸元齋筆本（以下、元齋本）に拠って、検討箇所を確認すると、次のようにあり、流布本との間に異同が認められる。¹¹⁾ 検討の都合上、引用本文の表記は原本のままとし、清濁、句読点の類いは施さなかった。ミセケチは「取り消し線」によって示している。

○ 元齋本・巻四・三七丁裏

かうまいりたるおりくゆ^はさるべきふみともとりいてさせ給
つ、学生ともなどのしどけなうならはしきこえたるどころく
なをし給

この元齋本に拠ると、傍線部は「大学寮で学ぶ者どもなどが、いい加減に教え申しあげた箇所を（狭衣ガ）直しなざる」と読み解く

ことができる。「返しどもなど」が「しどけなくならはし聞えた」動作主であることによって生じていた問題が、元齋本本文では解消されている。ここで肝要なのは、「学生」から「返し」という本文が発生するとは考えにくいことである。たとえ「学生」が「かくしやう」と平仮名で記されていたとしても、「返し」または「かへし」と本文が転化する可能性はかぎりなくわずかである。その一方で「学生どもなど」は、以下の想定に従うかぎり、為定本にみえる「かへりともなど」から充分発生しうる本文であるといえる。まず「かへり」を「加部里」の表記で伝える写本から「かくり（加久里）」なる本文が字形類似による誤写によって生じる。しかし、この「かくり」では意味をなさない。読者でもあり、作者でもあった享受者らは、「かくり（加久里）」が「かく生（加久生）」の誤写本文であると文脈より判断し、これを直すことで「かく生」本文が発生したのではないか。この「かく生」に漢字を宛てれば「学生」、すなわち紹巴本文となるのである。なお、為定本「かへり」は「かへし」の「し（之）」と「り（利）」との字形類似による本文転化から生じたと推察される。「学生」から「返し」「かへし」が生じにくいことを確認したこと

斯界において「紹巴本＝流布本の原型」説は支持されているようだが、仮に従来どおり「紹巴本＝流布本の原型」とすると、流布本は紹巴本（元齋本）「学生どもなどのしどけなうならはしきこえたるところ／＼なをし給」の一文が解釈可能であるにもかかわらず、これを意味不通本文「返しどもなど」へ校訂したことになる。より分かりやすい本文へ改めるのであれば、その本文校訂の在り方も理解しやすい。けれども、これとは逆の本文批評がなされたとみるのは、深川本の本文や異本の本文と比較して「読みやすい」流布本文にあって、あまりにも不審である。「紹巴本＝流布本の原型」説には再検証が必要である。

まとめ

ここまで「返しどもなどのしどけなくならはし聞えたる所／＼」の一文の本文分析をとおして、通行する注釈書の在り方を再検討してきた。如上の作業をつうじて「返しどもなど」の「文字どもなど」が解釈不能本文であることを確認し、通説に無理のあることを示すことができたかと思う。本稿では、おびただしいヴァリアントで知られる狭衣物語の本文を鑑賞論的価値判断から云々するのではなく、正確に読み解くことで本文の問題を論じてみた。本文読解は狭衣物語の本文の問題を別扶しうる」と示せたならば、本稿にも意味があったかと思う。¹³ 本稿の是非については、諸賢のご批正を庶

幾するばかりである。

なお、「かくし」から損傷本文「かへし」が生じたとみられることはここまでの検討からも知られるとおりである。そして、「のかへし」から為定本「かへり」が派生した。鎌倉写本群において「かうし」「ふみし」「もし」「かへり」などの異同が認められることに鑑みると、この「返しどもなど」にまつわる本文のヴァリエーションは、鎌倉期の一つ前、すなわち平安末期には既に存在していたと推測しうるのではあるまいか。狭衣物語の本文については、いまだよく分からないことが多い。しかし、だからこそ、各人が狭衣物語の本文と向き合い、本文を批判していかねば、見えてくるものも一向に見えてこない。いわんや注釈書に依拠する研究をやである。

注

- (1) 三谷榮一『狭衣物語の研究』〔伝本系統論編〕笠間書院、平成二二年）収録の一連の論稿。
- (2) 片岡利博『異文の愉悅 狭衣物語本文研究』笠間書院、平成二五年）。
- (3) 本文を引用する深川本・為家本・承応版本はそれぞれ『古典聚英 狭衣物語上』〔深川本〕〔古典文庫、昭和五七年〕、『古典聚英 ささころも上』〔為家本〕〔古典文庫、昭和五八年〕、『平安朝物語板本叢書2 狭衣物語下』〔有精堂出版、昭和六一年〕に拠る。引用のさい、句読を切る、清濁、鈎括弧を付す、傍線を施すなどの措置はとったが、表記は原本のままとし、てゐる。
- (4) 本稿で参看した注釈書は以下のとおりである。略称に続けて書名を記す。

『全譯』—吉澤義則『全譯王朝文学叢書 狭衣物語下』〔全譯王朝文学叢書刊行会、大正一三年〕。『大系』—三谷榮一・関根慶子『日本古典文学大系 狭衣物語』〔岩波書店、昭和四三年第三刷〕。『全書』—松村博司・石川徹『日本古典全書 狭衣物語下』〔朝日新聞社、昭和四二年〕。『集成』—鈴木一雄『新潮日本古典集成 狭衣物語下』〔新潮社、昭和六一年〕。『新全集』—小町谷照彦・後藤祥子『新編日本古典文学全集 狭衣物語2』〔小学館、平成一三年〕。『全註釈』—狭衣物語研究会編『狭衣物語全註釈Ⅶ 卷四（上）』〔おうふう、平成二六年〕。なお『全譯』の底本は明記されていないが、承応版本と思しい。

(5) 三谷榮一『狭衣物語卷四における諸伝本の基礎的研究—三系統存在の確認について—』〔注（一）同書収録、初出は昭和三七七〕。この巻四の系統弁別にかかる疑問については片岡利博『狭衣物語諸本の分類と系統』〔注（二）同書収録、初出は平成一四年〕に詳しい。

(6) 注（4）掲出注釈書および『有朋堂文庫 狭衣物語』〔有朋堂、大正一〇年〕を確認したが、「しどけなく習はしきこえたる、所々直したまふ」と「しどけなく習はしきこえたる」と「所々」の間に読点を置き、文法上の不審を解消するものはない。「の」を同格と読み解きながら、諸注いずれも用法上の問題をそのままにしていることになる。

(7) 「へ（部）」から「く（久）」への誤写例はしばしば見受けられるものである。池田亀鑑『古典の批判的処置に関する研究』第二部〔岩波書店、昭和一六年〕にも誤写例が掲出されており、誤写しやすい事例として周知されている。

なお、「かくし」、つまり「学士」なる表現は、『源氏物語』および『狭衣物語』には見えないが、『うつほ物語』に見える。「学士」とは、東宮に経書の講義を行う「東宮学士」のことを意味する。東宮に「しどけなく習はしきこえた」人物として「学士」を想定することは文脈上不可能で

はない。

(8) 本稿で参看した諸本は数十本のぼろが、紙幅の都合上、特筆すべき異同が確認されたものに限定してここに掲げる。

字和島伊達文化保存会本(撮影写真および紙焼き写真)。為家本(『古典聚英』古典文庫)。為定本(『古典聚英』古典文庫。松浦本(天理大学附属天理図書館デジタルプリント)。為秀本(『静嘉堂文库蔵物語文学書集成』雄松堂マイクロフィルム)。為明本・慈鎮本(『狭衣物語諸本集成』笠間書院。九大細川本(公開画像。為相本(紙焼き写真)。

(9) 底本に「ふみし」とあることをもって「文字ども」という校訂本文をたてた『全註釈』の措置は理解に苦しむ。この「ふみじ」なる表現は韻散文問わず中古文学作品に見いだすことができないうえ、「文字」を「ふみじ」と訓む事例も見当たらない。『全註釈』は校訂本文をたてるさい、『新全集』の「文字どもなど」に引きずられたと推察される。分量としては「くわずかだが、先行注釈書の校訂本文に拠る本文校訂に意味はない。この校訂態度は即刻改められなければならない。

「文字どもなど」の発生事由は詳らかにしたが、為家本「ふみし」とも「松浦本「もしとも」の本文分析をつうじて想定することは可能であると思う。為家本本文の源流は、もともと「文士」と漢字表記で記されていたもの、あるいは「ふみのし」とでもあったのだろう。「文士」の読みは「ぶんし」あるいは「ぶんじ」であるが、これを平仮名にひらいて書写するときに「ふみし」なる本文が生じてしまった。または親本に「ふみのし」とある場合、書写段階にて「の」が落ちることで「ふみし」が生じる。この「ふみし」が為家本にまで継承されたと想定されるのである。松浦本「もしとも」の淵源は「文士」を仮名へひらいて書写するときに生じた損傷本文「もんじ」あるいは「もんし」であろう。松浦本か、あるいはその親本以上の段階での変化かは分からないが、この「もんじ」「も

んし」を写すさいに撥音便を無表記としたことで「もしとも」が生じた。これを松浦本は伝えているのである。このようにみえてくると、一見まるで異なる為家本と松浦本の本文が、実は同根であった可能性が見えてくる。——「学士」「博士」に対応する表現として「文士」が生じたのである。ちなみに、為相本「かたこと、も」は意味上「文字ども」のグループに属すと思いが、その発生理由については、その一切が分からない。

(10) 川崎佐知子「紹巴所用『狭衣物語』とその意義」(同『狭衣物語』享史論究) 思文閣出版、平成三年。初出は平成三年五月。なお、本稿で言及する川崎論稿はすべて同論稿。

(11) 川崎がいう「紹巴本」とは①大阪青山短期大学蔵毛利元康筆本、②大阪天満宮御文庫蔵木戸元齋筆本、③実践女子大学付属図書館常磐松文庫蔵寛佐本、④実践女子大学付属図書館常磐松文庫蔵中臣祐範本、⑤東京大学史料編纂所蔵押小路本を指す。このうち①②は紹巴所持本を写した旨を記す識語を備える伝本である(③④⑤は付属する『狭衣下紐』に同様の識語がある)。①は閲覧の機会を得られず、その全容は分からないが、幸い、②は原本調査の機会を得ることができた。それゆえ、②に拠り、紹巴本本文を示すこととする。本文の引用は撮影写真に拠ったが、小林理正「大阪天満宮御文庫蔵木戸元齋筆『狭衣物語』巻四・翻刻と解題(上)」(『詞林』六五号、平成三年四月)、および同「大阪天満宮御文庫蔵木戸元齋筆『狭衣物語』巻四・翻刻と解題(下)」(『詞林』六七号、令和二年四月・刊行予定)によって元齋本本文は確認可能となっている。

(12) 佐々木勇氏の「教示」による。

(13) なお、川崎論稿にみえる「紹巴予本」とは、元齋本の紹巴自筆加証奥書中にみえる「借予本書写畢」の「予本」を指し、紹巴所持本のことを意味する。

(14) 正確な本文読解を手掛かりに、本文の問題に切り込む論稿には、長谷川

佳男「巻二、第一群と第三群の関係——構造的本文批評の試み——」（同『平安朝物語・本文の科学』笠間書院、令和二年三月。初出は昭和六三年）や、後藤康文「もう一人の薫」（同『狭衣物語論考 本文・和歌・物語史』笠間書院、平成二三年。初出は平成元年一月）などを挙げる事ができる。とりわけ、長谷川論稿は、物語の筋にまでおよぶ狭衣物語のヴァリアントの在り方を、本文を丹念に読み解くことで論明した出色のものである。狭衣物語の本文を考えるうえで、裨益するところ多く、再三再四の熟覧を要する高論である。参照されたい。

【附記一】

本稿は広島大学国語国文学会令和元年度研究集会における口頭発表の一部を礎稿としたものである。

なお、本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費（課題番号・19111542）の助成を受けた研究成果の一部である。

【附記二】

大阪天満宮御文庫、ならびに宇和島伊達文化保存会には貴重書の閲覧・撮影、および利用を許可いただくなどの格別なるご高配を賜った。特に記して衷心より御礼申しあげる。

—こばやし・ただまぎ、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程在学・
日本学術振興会特別研究員（DC2）—